

T A O G E N

発行人◎高田かつ子 編集人◎青山富士夫 事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方 TEL 044-522-4185

証 検 東日流六郡史絵巻と 国史画帖大和桜

偽作説は成り立つか

今巷に和田家文書偽作説が横行している。その一つが、「東日流六郡史絵巻」の絵が、「国史画帖大和桜」と酷似することによって、前者は後者を種本とした偽作である、とする説である。

「東日流六郡史絵巻」(以下絵巻と呼ぶ)は、和田家文書の一部で、寛政年間、秋田孝季らが、字の読めない人にも歴史の大意がわかるようにと著作した、東北中心の歴史絵ときである。「国史画帖大和桜」(以下大和桜と呼ぶ)は、昭和十年、当時の軍国主義の風潮に乗って出版された国史名場面集で、小学校教師用副読本風である。二年間に百版を超える驚異のベストセラーとなったのは政府文部省の強力な後援があったせいであろう。

「絵は古今の名画より採り…」

なるほど、両者の絵を比較すると「絵巻」約八十図、「大和桜」六十二図のうち、明らかに類似する絵が二十五図から二十九図数えられる。かなり高率である。類似といっても、

画題はそれぞれ別で、構図や、部分の描写に酷似があるというものもある。このような状態を説明する方法は二つしかない。両者の間に何か直接的な関係があるか、または、両者ともに、共通の第三者の影響を受けているか。そのどちらかである。

私たちは、そのことを念頭において、まず「大和桜」を開いて見た。すると意外にも、探索のヒントは、その序文に明示されていた。

「(本書は)資料は我が国神代より明治維新に至る間の歴史により、絵は古今における武者錦絵中の日本趣味豊かなる名画より採り……」

すなわち、昭和十年の発行とは言いながら、中味である絵画は古来の名画から採った、と言っているのである。従来私たちの耳に聞こえてくる偽作論は、なぜかこの序文には素知らぬ顔で、昭和十年の発行ということをも以って、あたかもその時点で

の創作であるかのように喧伝された。そして、その心象のままに、地元の東奥日報など、偽作説を肯定するかのような報道もなされたのである。

☆和田家文書(東日流外三郡誌ほか)
寛政年間に、学者秋田孝季と協力者和田吉次が、蒐集著述した、津軽、東北の歴史文書。五所川原市和田家に伝えられる。現在公刊されているのは、その明治時代の写本。従来の歴史常識から見ると、余りにも意外性に富むため、一躍注目され、一方現代人による偽作と論難する人もいる。古田武彦氏は一貫してその史料価値を高く評価。

模作が当り前の武者錦絵

そこで私たちは、改めて、右の序文を参考に「大和桜」の絵を再点検してみる。同書には画家の氏名は一切ない。名無し画集である。ただ、絵の隅に、画家のサインが残されている絵が十六図見つかる。名鑑によつてその名をたどると、大部分が明治前期、一部が幕末の画家であることがわかった。そこで私たちは、この方面に明るい研究者を都内に訪ねた。敢えて氏名を伏せるのは、こうしたケースで、偽作論者につきまわられて迷惑が及んだ実例があったからである。

「江戸から明治にかけてのこの世界は、模作盗作の黄金時代ですよ。二重三重に平気で真似し合っています。現代とは絵画の常識が違うのです。」
「ある意味では、明治の武者錦絵にオリジナルなど、まあ、ゼロと言

つてもいいでしょうね。」

複数の方のこういう証言を得て、私たちは、さらに「大和桜」を見る。絵の中に、雅号と共に「応需」と書いたものが十二点ある。応需とは「画家が特殊な注文によって作画した場合、落款に応需と銘した。応需書きは……注文による制肘があるので面白味も芸術味も削減される場合が多い」(浮世絵事典)

ここに「特殊な注文」という場合、当然模写も含まれる。つまりこれは、明治の画家が、さらに明治以前の絵に倣って描く場合が多いことを物語っているのである。また、模写した場合でも、応需とサインするとは限らない。「大和桜」には、明治の代表的な錦絵画家芳年の作が、九点採られている。だが、芳年は模写であっても応需と書かない例が多い。

また「大和桜」の中の、「今川義元桶狭間討死図」は、構図、背景、人物の姿勢など、「絵本太閤記」から採られていることが明らかだ。

「絵本太閤記」は、寛政八年大阪で出版され、人気を取った。数年後幕府によって禁止されたが、題を変え、体裁を変えて流布された。九百点に及ぶ挿絵は、盛んに錦絵画家たちのお手本にされたもので「大和桜」にも約十点の絵の投影がある。

こうして私たちの探索は、秋田孝

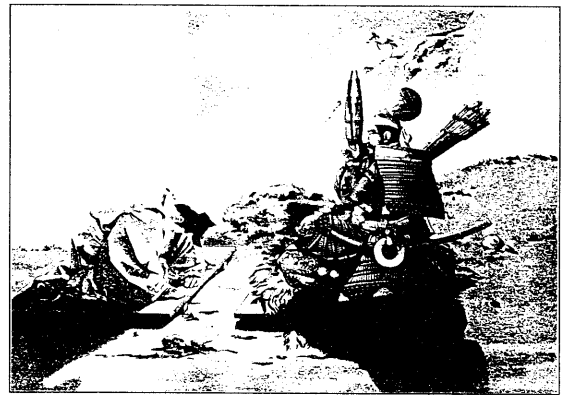


▲ 図A

季と同時代、寛政年間にまで及んだ。だが、今のところ、「絵本太閤記」と「東日流六郡中史絵巻」とは関係がないようである。とすれば、それ以前はどうであろう。ここに、「絵本太閤記」の画家、玉山の詞書きを見よう。

「書肆予に豊公一世の軍事を図せん事を請う。図画は予が産業にしあらば、辞すべきに非ず……そもそも予は太平の逸民、いかんぞ乱れたる世のありさまを知らむや。唯硯に對し筆を弄し……見ぬ昔を思いやりて猥に写し心に委せ写しぬれば、軍器兵具、旌旗鎗刀、城取陣所の事に到りては、古画に見及びたる儘に写してあながちに改め正さず……軍事に及びては知らざるままに写しぬ」

つまり、自分の知らない軍事関係



▲ 図B

のことは、すべて古画のままに写して手を加えなかった、と堂々と述べているのである。これを、寛政当時の錦絵作家一般の流儀と見れば、当時の武者錦絵は、さらに先行する古画の模倣によって描かれたこととなる。一方で「東日流六郡中史絵巻」は、絵の元となった資料を次のようにあげている。

本巻の画原目録 八巻 記 「荒覇吐文語絵言葉」 「高清水山王絵馬伝」 「羽賀寺勅史絵巻」 「和田家文書」 「秋田家古記集」 (以下略)

私たちはこれらを一つでも見たいと思うが、今果たせないのを遺憾とする。が、とにかく、一つの可能性として、これらの資料の中に、江戸後期の錦絵作家たちがお手本とした



▲ 図C

「古画」が、多数含まれていたと想定することは、あながち無理な想定とは言えないのではあるまいか。

不自然な大和桜の絵

次に、別の側面から「大和桜」と「絵巻」との、類似した絵を比較して見よう。「大和桜」に、新羅三郎が、箏を教えてくれた恩師の子息時秋に、足柄峠で箏の秘曲を伝授する場面がある。新羅三郎はこれから戦いに行く。もしものことがあれば、秘曲が失われるのを惜しむのである。(図B) この絵柄は、そっくり同じく、「絵巻」にもとり入れられている。こちらは、前九年の役、阿部貞任と長子千代童丸が自刃する場である。館は火の海だ。死を共にする千代童丸

はわずか十三才、憐れもきわまる場面である。(図A)

絵では、秘曲を授かる時秋も、自刃のため、家伝の短刀を受ける千代童丸も、同じ姿勢で、両手を地についでかしまつていっている。絵をよく見ていただきたい。どちらが自然であるか。どちらが情景に叶っているか。

第三の絵を登場させよう(図C)。新羅三郎の逸話は錦絵に好まれて、多くの類画がある。その一つ、江戸末期の芳虎の作。時秋は、秘譜の巻物を開いてじつと聞き耳を立てている。これが自然である。両手を地についでかしまつていては、秘曲も心に届かないのではなからうか。一方、貞任と千代童丸の場面では、悲壮感の極致をあらわして、何の不自然もない。

もう一つの例。「大和桜」では、源義経「堀川夜討の図」と題する。出陣に向かう義経に、部下が階段の下から弓を手渡ししている。その弓が異常に長いのだ。高い踏台にでも上がらなければ引けそうもない弓だ。

対する「絵巻」の絵は、「萩之台合戦」。全体の構図と中心人物の姿勢がそっくりであるが、こちらは弓を手に持つて、少しも違和感はない。

同じように両書の絵を、「大和桜」⇔「不自然」、「絵巻」⇔「自然」として比較できる例を、私たちはいくつらで

以下4頁へ続く

「ビッグバン」「進化論」の先駆があった

エラスマス・ダーウィンと秋田孝季 上城 誠

「和田家文書」偽書論争において二つの科学史上の争点があった。

ひとつは「東日流六郡誌大要」等に述べられた「宇宙創誕」は「大爆裂」によつたという、まさに「ビッグ・バン」説のようなもの。

ひとつは、生物は「水中に成れる菌なる如きもの」から成長したという「進化論」如き説。また生物は「耐生進化」「適生に変化す」という「適者生存」の理論等である。いずれも秋田孝季たちが長崎で紅毛人から講述を受けたと書かれている。寛政十年〜十二年の間、西暦では一七九八年〜一八〇〇年のことだ。

科学史の定説では「ビッグ・バン」は一九五七年、アメリカのマルティン・ライルが唱え、「進化論」および「適者生存」説はチャールズ・ダーウィンが一九世紀に確立した学説であったために、上記二点をもつて

「和田家文書」偽書説論者は、現代人偽作説を声高に主張していたのである。しかし、古田武彦氏がその著「真実の東北王朝」で注意を促したように、上記二点は偽作説の根拠にはならないことが判明した。

方向に拡散したならば、そのようなことは起こらないだろう。」

まさしく未完成ながらも「ビッグ・バン」説である。

そしてエラスマスは一七九四年「ゾーノミアあるいは生命の法則」を出版し、「進化論」と呼び得る説および「適者生存」説を発表する。「現存するすべての植物と動物は(太古の海の中で)自発的に生じた微少な生物を起源としている。」

上記は「ゾーノミア」より数年後に発行された「自然の殿堂」中の言葉であるが、ほとんど内容的に同一の表現が「ゾーノミア」中に現れている。その内容面および使用語句等の「和田家文書」との驚くべき対応は別に詳述したい。

私たちは、現代人に多く見られる「平可通」さを捨てて、未知の可能性を秘めた「和田家文書」と真剣に向かい合わなければならない。それのみが秋田孝季と、大いなる被害者・和田喜八郎氏に唯一報いる道であろう。

この一文は工作舎刊「エラスマス・ダーウィン」(著者デズモンド・キング・ヘレ、和田芳久訳、一九九三年発行)をもとに、古田武彦氏のご教示を得てまとめたものである。(静岡市在住 本舎会員)



も指摘できるが、残念ながらそのスペースがない。古田武彦氏も、古田史学会会報で、さらに顕著な例を多く解説されているが、いずれも肯綮に当たると言うべきである。

このように見てくると、「大和桜」は、不自然な誇張と作為に満ちた、一種の欠陥画集である。私たちはその背後に、当時の軍国主義社会の、思想的頹廃を見る思いである。

これに対して「絵巻」の方は、一見たどどしい筆致ではあるが、主題を率直に表現して、違和感がない。もし、「絵巻」が「大和桜」を真似たと言ふのなら、不自然なお手本を失

敬して、自然な絵を作ったことにな

る。信じられるだろうか。

私たちは、現段階をもって、証明を終えたとは思っていない。まだまだ謎はある。が、私たちの方法は、原史料に矛盾を見出し出したとき、それを直ちに史料の誤りとして片付けないで、自らの判断の誤りをも顧みることもある。見せかけの印象を鵜呑みにして、頭から偽作などと決めるかかのような考え方ではなく、一歩、実証を重ねて行くことにより、正しい史料批判に到りたいものと思ふ。(八谷 進・富永長三)

「信濃縄文王国の旅」に参加して

立川市 福永 晋三

十月九日(日)朝、小雨。新宿西口でバスに乗車。高田会長の自信張る宣伝に乗せられて「古代通史」購入。隣に座られたご年配の方、名刺を頂いたら、青山富士夫さん。「人麿の運命」の写真を撮られた方。あつげに取られているうち、お馴染みの資料満載の鞆を携えられて古田先生がご乗車、バスは信州へ旅立った。

連休恒例の渋滞に遭っても「かえってゆつくり話ができますね」と、まずは縄文のお話があった。三内丸山遺跡の「二〇メートルを超す建造物」と

『東日流外三郡誌』の「津保化族伝話」にある「雲を抜ける如き石神殿」とに着目され、縄文時代の民族の大移動を熱つぽく語られた。津保化族がシベリアから米大陸へわたり、故郷へ帰る途中に至ったのが津軽という。出雲の国引き神話とウラジオストク周辺に出土する黒曜石の約五〇%が隠岐島のものである事実との一致など、縄文に国家ありとの認識が伝わる。

その「縄文王国」の一つか、最初の目的地「釈迦堂遺跡博物館」到着。さまざまな表情の土偶と、現代のよく似

た子供の顔との並ぶパネルが面白い。間違いなく縄文のこの地に、現代の子等の祖先が生きていたことを彷彿させる。現代人の誰一人として、縄文の先祖のいない人はない。この単純な事実

さったのだ。一行の見学のために土器まで運んで下さっていた。無上のご親切のお陰で、最古のストーンサークルの説明を頂き黄昏時に心行くまで見学できた。

に単純に感動する人間であり続けた。博物館の展示は縄文の人々の生活を道具から再現した優しく暖かいものだった。

諏訪に戻って宿に入る。和やかな夕食の後、待望の講演(?) 青森県市浦村の日枝神社の「宝剣額」の再発見に基づいて、「東日流外三郡誌」の偽書説を次々に小気味よく論破されて行く。真摯に真実を求める側には、事実が後からついて来る。そんな気がしてならない。

車中で再びお話し。こんなに長時間、先生の熱弁を拝聴できるとは思いもよ

二日目。古田先生が「縄文都市」のヒントを得られた「阿久遺跡」に。原村文化財収蔵庫を解放して頂き、ここでも学芸員・五味さんの懇切な説明を受けた。収蔵庫の土器は時代順に並べられ、量に圧倒される。箱に積まれた土器の破片の方が多い。正しく「都市」の遺物だと実感できる。我々は「縄文王国」を確かに訪れている。往古と変わらないであろうどんぐりを、三個記念にポケットに押し込んだ。八ヶ岳美術館で阿久遺跡の写真や出土品を補充の意味で見学。その後上田市の生島足島神社を訪れ、鳥居峠、吾嬭神社、大宮殿神社と群馬県馬場の「吾嬭はや」の地を実踏して川越へと帰った。鳥居峠では磐井の君の末裔のお姫さま(蟻川夫人)とお会いし、大宮殿鼓

先生の熱弁を拝聴できるとは思いもよ

以下6頁へ続く

岩戸山古墳へ行つた。八女に二度目の講演に来て以来だった。前日(十一月十三日)博多で講演した(「多元的古代」研究会・九州)その翌朝、福岡空港発のバスで八女に向う。博多の地元のお三方(恵内・柴藤・柳元さん)にご案内いただき、スムーズだった。(現地の松延さん、稲員さんの御迎えを得た)。

現地は、小雨。先ず資料館に行つた。館長さんたちが昨日のことのように、私の講演について記憶しておられ、話題にされたのは恐縮した。

私のお目当ては、現在行われている科学調査だった。各研究機関のそれぞれの専門家が到来して、各自、自分の方法でリサーチする。そういう話を聞いた。「多元的古代・九州」の灰塚照明さん、それに現地の資料をいつも送って下さっている恵内慧瑞子さんからの情報である。

わたしも昨年来、高知県の足摺岬で種々の科学的調査に取り組んでいる。リコー、ソニー、YHP、それに高知大学の専門家に来ていただき、いわゆる「縄文灯台」をめぐる古代実験は、予想以上の大収穫を収めた。有難かつた。

今年は、四月の赤外線写真などを用いた予備実験のあと、十一月二十一日には飛行船から多目的の写真撮影を行う予定。当日の晴天と好風(無風もしくは微風が望ましい)を祈るばかりの現在だ。

だから、今回の岩戸山の調査には関心をもった。その動静に触れたいと思つたのである。

調査の現地責任者の赤崎敏勇さんも、温く迎えて下さつた。先週末の科学調査の概要を説明していただき

HISTORICAL

科学調査

古田武彦

た上、わたしのために本日の科学調査の实地で実際をしめしたかったのだが、雨が強くなつたので断念した、との思いがけぬ御好意だった。もとよりわたしは、にわかになつてきた一見学者にすぎず、そのような現地実視に加えていただくことなど、望外の願いにすぎなかつたから、その御好意だけを有難くお受けした。

科学的調査は次のようだった。

- (一) 電気探査(リアルタイム)
- (二) VLF探査 (一) 地中レー

ダー探査 (二) 磁気探査等である。専門家たちは、奈良国立文化財研究所をはじめとして、秋田大学、九州大学、東京工業大学という豪華メンバー。来年一〜二月には京都大学も参加の予定である。(この点、八女市教委の山口竜一課長に再確認した。)さすが、三十六才の気鋭の市長、野田国義さんの決断と感服した。だが、何より忘れてならないのは平成元年の市議会決議だ。岩戸山古墳の発掘と科学的調査を決議したので

ある。快挙だ。

当然ながら、本番は「発掘」だ。スコープなどの科学的観察も、現実の「発掘」で(「予想に反した」)例は、先般の久里双水古墳(佐賀県)にもあつた。当り前のことである。

被葬者名の判明している、わが国では稀有の古墳、わたしにとっては「九州王朝の君主」である筑紫の君・磐井の墓、それが本当に「発掘」される日、日本の歴史は新しい幕明けを迎えるであろう。少なくとも磐

井を「逆賊」視してきたような「近畿中心」のイデオロギー偏向史観から、日本の歴史教育が解放され、「人間の歴史」を人々が学びはじめる、一つの重要な端緒が開かれることであろう。

けれども、その「発掘」は一八女市の財政能力を越えるものだ。だから、県や国が是非乗り出してほしい。志ある会社もまた。公正無私の科学の立場に立ち、時間と金を投入してほしい。福岡県や日本全国の人々が、その「声」をあげてほしい。くりかえし、あげてほしい。

そのように願ひながら、雨の岩戸山古墳の別区のひとつりに立ちつくんでいた。熊本県から来て、資料館の入館者名簿でわたしの名前を見て、飛んできたと言われる、中年の婦人の方のお声に呼びさまされるまで、その想念の中に没入していたのであつた。

新春

古田武彦大講演会のお知らせ

本会主催の新年講演会は、1月15日(日)午後一時半より、中央区八丁堀・東京都勤労福祉会館大ホールで開催の予定。演題その他詳細は、正月はがき通信でお知らせします。

神社では蔵手文刀を拝見。車中では筑紫「高良大社」のビデオや「部分の総和は全体になる」の先生の青春のメモリー「キュリー夫人」の映画が流れるなど盛り沢山のプログラムを満喫できた。

会の幹事の方々に深謝し、次回の旅への会員のご参加を切に願う。



山田宗睦 日本書紀講座 第五回・第六回

本文にはない天照大神

イザナキ、イザナミによって創られた大八洲。各々のクニの名前は同じ時期に生まれたのか。そんなことはない。書紀を理解する原則の一つは「一つの文章の中に違った時間がたたみ込まれている」ことである。クニが登場してくる時間を整理してみると、八つの国の構造、関連が解ける。大きな謎はなぜ淡路が最初に来るのかということである。

書紀の作者は筑紫のことばかりを書いた神代の話を大和に結びつけるため淡路をトップにもってきた。多くの学者はそれを見抜けず、淡路の海人族が国生み神話にかかわっていたのだらうなどといっている。書紀の中に過去・

現在・未来という時制(TENSE)が重層的に折り込まれていることに気が付いていないからである。

もう一つの原則は地名は小さいものほど自然であるということである。越といった広大な地域が国生みの段階で出てくるのは不自然。佐渡とともに筑紫の話を広げるために後世の概念をとり込んでいる。大八洲をタテ(時間)とヨコ(空間)から立体的にながめることによって、筑紫から大和へ、「盗まれた神話」の構造がみえてくるようである。

国生みの次に山川草木を生んだ。そしてイザナキ、イザナミの両神は次に「天下の主者」を生むと予告する。日神、オオヒルメムチ、当然のように天照大神のことと理解されている。しかし書紀の作者は異伝から天照大神の名を出している。これは天照大神が最近の創作(持統朝)であることを知っていたからではないか。書紀の作者は本当でないことを本当のように仕立て上げるが、一方で正直でもあるという奇妙な性格がここでもうかがえる。

日神神話としては、オオヒルメムチの原形はヒルメであり、紀元前後の話ではなかったか。それを天照大神と結びつけるため、形容詞、尊称をつけて際立った存在に作り上げた。ここでも違った時間がたたみ込まれている。日神の次に月神が来るのは自然だ

が、次にヒルコ、さらにスサノオを生む。ヒルコも日神である。太陽神を現在の感覚でみてはならない。太陽神が複数存在してもおかしくない。中国では太陽を十個から一個にしてしまった話がある。イザナキ、イザナミの子供としてスサノオは異質である。日でも月でもない、星でもない。スサノオ以外は天照神話の枠に入る。この天照神話が天和のものでないことは明らかである。

また古事記の中ではアマテラス、ツ



魏志倭人伝「男子皆露紒以木絲招頭」について

岩崎 順子

魏志倭人伝にある倭人の風俗に見える「木絲」は、今のモメンではないという、比較的安定した解釈がされています。ではこの記述は何を現しているのでしょうか。諸橋漢和によると「木綿」は「モクメン、パンヤ、斑枝花」とあります。そこでパンヤを調べますと「実は握り拳大の手榴弾のように、夏も暑い盛り突然パツクリと割れて、もりもり白い綿毛(光沢がある)のついた種子を吹き出す……(その分布は)インド全域、特に東部ベンガルに多い。」(インド

花綴り・木犀社)「根、樹皮、花、花実は薬として利用される」(ネパール・インド

クヨミ、スサノオの三神にきれいに整理されているが、その過程を書紀のこの段は示しているのではないか。記は紀より新しい。

以上、混沌の中から原則に則って構造を明らかにしていく山田先生の読みの一端に触れてみた。小生にとつてはひたすらエキサイティングであった。(木村由紀夫)

●第七回 ▼12月11日 午後1時半

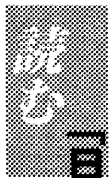
▼文京区民センター(会場当日受付あり) ●一月は休講

の聖なる植物・八坂書房)ということ。次に「招」はまねく、あげる(諸橋漢和)の意味がありますから「以木絲招頭」はパンヤの白い綿を頭の上にあげている状態となります。

以前テレビの旅番組の中で、韓国の「農楽」を紹介していて、頭を白いフワフワしたものですっぽりおおい、踊っていました(因説韓国の歴史・河出書房新社)。パンヤが有用な植物であること考えあわせると古代人が関連した踊りをもつていても不思議はないと思います。

インドと中国の交流については、元始年間(二世紀初頭)南インドの黄支国から朝貢があったこと、その他紀元前後からインド人航海者が東南アジアへひんばんに來航していた記録が見えています。(地域からの世界史4・朝日新聞社) 今後は、東南アジアと倭地との交流を追って行くのが課題です。





「日本書紀を批判する」

古田武彦・渋谷雅男共著
新泉社刊・1545円

清水 茂樹

「日本書紀を批判する」は明快な書物である。私たちは、古代の事実とそれらの総合的關係を探究している。そこから古代の真正な姿を捉えたいと願っている。それには最初に方法論をはっきり決めて、資料に取りかからねばなるまい。個々の古代の事実を、それだけを単独で探究しても、全体的相互關係を位置付けしていない研究の場合には、よく研究されていても、結局はよくわかったようでいて何も明らかに出来ない。謎に始まり、途中はよく探究されているが、結局は再び謎に終わっているという古代史研究は多い。二十年たっても百年たっても、古代の真正な姿は相変わらず謎たこのようでは、何か研究の方法がおかしいのではないかと、私たちは気付かねばなるまい。古田武彦氏の周辺からは多くの古代史の探究者が出てくる。この渋谷雅男氏は正面から全体的に資料を扱う、骨太の研究者である。全体的位置關係を常に意識している数少ない古代の探究者である。

古田武彦氏は「三国志」の邪馬壹國の一字から研究をスタートさせて、古代史の解明に最初の突破口を開いた。

その後多くの論証がなされ、その示唆に富む古代史像から、渋谷雅男氏は多くの補助線を得て、記紀の年表を推古から逆に過去に遡らせて突き合わせるという貴重な作業に取りかかった。年表というものは過去から現在に向かつて書かれるものだが、過去に遡って書いていく年表とは、これはすでに或る才能である。しかしこれは実は歴史の本質に沿った方法である。つまり歴史とは語られた「もの」であるが、その語るかと言えば、その或る時点を原点に定め、



「古代通史」

古田武彦著
原書房刊・1800円

「主婦の友グループ」主催の講演録であるこの本は、古田先生の史書の中では、非常に読みやすく、面白く、そして「歴史学の本道は多元的視点にある」というバックボーンに貫かれた骨太の通史です。「投石の時代（旧石器時代前期）」から語り起し、「記紀神話を生んだ時代背景」に、すでに性差別があり、「繰り返し巻き返し暗喩させられて」女性蔑視が定着していきます。しかし、と、紀の数ある一書群にある女性蔑

め、時間軸上を遡り、一定の過去の時点を第二定点として、その定点から時間の流れに沿って「もの」語るといつの姿である。「日本書紀」といつの史書は……ある意味では壮大な偽装の史書というべき側面をはっきりと持っている……と語るこの著者に私は今後の成果を期待している。私は思うのだが、この壮大な偽装がなされるには、また明らかになされていない多くの側面があるはずだということ、それらは必ず明らかにならねば探究は終わるものではないということである。そうでなければ現代日本にとっても、原点を定めないままこれかもし進まなければならぬ、ということになってしまっているのではないのか。

大内 道子

視以前の神話に言及します。その「第十の一書」では、女神男神は手を携えて国を生みます。そこでは蛭児も童船に乗せて流されてはいません。垣間見た「多元」です。「歴史は、成功した侵略は（侵略と）書かぬことになっている」……ハワイの統一、ゲルマンの大移動、天孫降臨となります。「成功した侵略」は、それを骨格として考えないと、その後の社会はわからない。先生が、滅ぼされた者、弱者に視点を据えられるの

は、真実を追及する手段としてだけではなく、虐げる者に対する憤りと人に対する優しさから……だと思えます。そしてそれらは歴史に目を向ける者たちに、先ず、求められるべき資性ではないかと思われるのです。「これから子供たちが社会科や歴史を勉強していくときに、どういつことに気をつけたりよろしいんでしょうか」と、受験生をもつ母親からの切実な質問がありました。多元史観に初めて触れた戸惑いですが、先生は「いまは、それで覚えておきなさい。しかし本当の歴史を知るためには、あんな学校に入ったらこれ読みなき以外、どういつに」と答えておられます。このように答えを繰り返さなくても済む日本にするためには、またまた私たちは気の遠くなるような実証を重ねていかなければならないでしょう。しかし母親たちが真実に向かつて歩み出すとき、確実に歴史は書き替えられると、この本は私たちに語っているのです。

最後に一つ疑問が残りました。十五頁に「中国や朝鮮ではお化粧道具だった鏡」とありますが、朝鮮鏡とされる「多鈕細紋鏡」は、吊り下げ易い、凹面鏡である、白銅製である、などの特質を持ち、単なるお化粧道具ではないように思えます。日本での出土は八遺跡、九面全てが弥生前・中期の遺跡であり、沿海州の出土例を含めて、疑問として残りました。

